



才能移転



Yamanaka
Tomotaka

山中與隆

Duo-Yamanaka

才能移轉

山中與隆

目次

才能移転

〔天上の会議〕

1

〔三十七億六千二百七十二万四千三百三十三番の

男〕

19

〔コピーか移転か〕

53

〔神々の失敗〕

79

〔萩男に残る神の力〕

99

編者あとがき

135

才能移転

山中與隆 作

〔天上の会議〕

神々は席に着いた。座長の槌の音で、円卓を囲む

十二人の委員は一斉に私語を辞めた。座長の厳かな声が、会議室に響く。

「会議を開きます。議題はすでにご承知のように人間の能力コピーについてです。本日の重要議題は、生体実験の対象を決めることです。まず開発主任から説明願います」

開発主任が膨大な資料を前にして話し始めた。

「本議題の能力コピーは、既に可能な技術として地

球人に適用する段階に達しております。しかし初め
ての人体実験でありますので、予期せぬ結果が出る
可能性もなしとはいたしません。もつとも可能性が
危惧されるのは、コピーではなく移転になることで
あります。能力移転が起きると、移転元の人間の能
力はスポイルされてしまいます。ただし特定の能力
を移転した場合、移転元の人間の一般的能力には特
に影響は無いと考えられます。したがって本日の実

験の対象選択にあたっては、万一コピーに失敗して、移転となっても構わないことを前提として選択していただきたいのです。よろしくお願いします」

会議室ははざわめいた。人間の運命を自由自在に操ってきた神たちにとっても、これは初めての試みだったからである。彼らがざわめいたのは、コピーに失敗して移転になった場合、移転元の人間の能力がスポイルされることを心配などしていない。それよ

りも、そのようなことが起きた場合の、移転先の間や、移転元の人間、その周辺の人間たちの反応を想像して、面白そうだと言つてざわめいたのである。座長の槌がなつて、会議室はふたたび静寂になつた。「我々にとつては、人間の運命を操ることは神の特権として認められた権利であり、人間社会の秩序のために義務でもあるのだが、いやしくもそのような運命に翻弄される人間たちの右往左往する姿を、面

白がって笑うようなことはあつてはならない。各自心して議論を進めてもらいたい」

最近地球上では昔ほど戦争が起きなくなつたため、当たり前のように大量殺戮が行われて、その一人ひとりが無残な運命に放り込まれると言つたことが少なくなつてゐる。その代わりに神々はいたずらに大災害を引き起こして、人間たちの運命を翻弄しようとする傾向がある。彼らはこれを

「運命の活性化」

と呼んで、ある間隔で人間社会に必要なこととして
いるのである。そんな場合でも、いまのざわめきの
ような、逃げ惑う人間たちを面白がる不遜な輩がい
るのである。

会議室はしーんとなり、先ほどの開発主任がふた
たび説明に立った。

「これは才能をコピーする実験でありますから、効

果がはつきりと見えるようにしなければなりません。今回の実験では、音楽の能力を対象にしたいと考えています。ある楽器の演奏能力のことです。コピー元の演奏家は人間世界で誰もが知るような一流演奏家であることが必要です。そしてコピー先は、音楽はやっているが誰が見ても非常に能力が低い人間がいいのです。誰か候補を挙げてください」

会議室はまたもざわめいたが、一人の神が発言した。

「私はバイオリニストのヒラリン・ハリーンを推薦したいと思います。彼女はいま人間界では人気絶頂のバイオリニストで、紛れもなく超一流の能力を持っています」

別の神が発言した。

「バイオリニストなら、ビクトー・ムーロの方がいいのではないか。ムーロはハリーンよりもさらに完璧な演奏能力を持っていると思うがどうでしょう」

ハリーンを推薦した神がふたたび発言した。

「私もムーロのことは考えた。しかしムーロは演奏スタイルを変えていく傾向がある。したがって彼女
の能力には多くの複雑な要素が混在していて、一貫
したスタイルのハリーンのほうがこの実験には向い
ていると考えたのですがどうでしょうか」

別の神が立った。

「クラシック好きのお二人らしい議論になっている

が、もつと多くの人間どもが熱狂する音楽の方がいいのではないかね」

「人間どもという言い方は慎んでください」
座長が制したので、そう言った神はもじやもじや頭を掻きながら前言を訂正した。そのときフケが飛び散ったので、臨席の神が自分の肩にかかったフケを払い落としながら隣の神を睨んだ。別の神が発言した。

「わたしは特にクラシック好きじゃないけど、やっぱ
りクラシックがいいと思うね。これは演奏会を楽し
むための人選ではなく、あくまで能力コピーのため
なのだから、ガチャガチャ、ギヤーギヤーした騒が
しい音楽よりもバイオリンのようにシンプルに能力
を評価できるものがいいと思うね」
もじやもじや頭の神が、またも頭を搔き搔き立ち上
がった。

「あんたがクラシックファンでないことは知って
いるがね。日本の浪花節が好きだと言っていたからね。
しかしバイオリン以外はガチャガチャ、ギヤーギヤ
ーとは、少しばかり見識を疑いたくなりますな」
座長の、議題をそらさないようにとの注意で、会議
室は静かに戻った。ほかに提案も無かったので、ハ
リーンとムーロで多数決を取られ、大差でハリーン
が決まった。問題はコピー先の人選である。開発主

任が言うような

「コピー先は、音楽はやっているが誰が見ても非常に能力が低い人間」

は世界の超一流と違って無数にいる。その中から、世界の超一流の能力をコピーされる幸運の白羽の矢を誰にするか、難しい選択である。神々はそれぞれのスーパーパーソコンをはじき始めた。自分のパソコン画面を隣の神に見せながら、二人でゲラゲラ笑つ

ている者もいる。座長がじろつと睨んだ。一人の神が手を上げた。

「みなさん、三十七億六千二百七十二万四千三百三十三番を見てください」

「ほう、日本の大人の男性ですな。結構年を取ってるじゃないですか」

「そう、彼は若いときからバイオリンをやっているが、いわゆる「下手の横好き」と言うやつで、何十

年も大して技術が向上すること無く、飽きもせず七十三になっても続けている。彼ならコピー効果がはつきりとわかると思いますよ」

「プロ同士でなくてもいいの」

「構いません。それよりもコピー効果がわかりやすいことが重要でしょう」

「コピー効果を重視するのですしたら、いつそのこと音楽なんかまったくやっていない人間を選んだらど

うなのですか」

「もちろんそういうことも可能ですが、楽器を手に入れることから始めなくてはなりませんし、その人間が突然バイオリンを弾きだす場の設定も作る必要があつて、ちよつと面倒ですね」

「じゃあ、バイオリンでなくてチェロとかをやつていたのが、急にバイオリンが弾けるようになるというのはどうです」

「それもいいかもしれませんが。どうしましょう」
開発主任が口を挟んだ。誰かが座ったまままで声を出した。

「いま提案があつたような人間は、世界に何万人といるでしょう」
開発主任が、だらだらと続く議論にやや嫌気がさして、

「その通りですが、先ほど具体的な提案のあつた三

十七億六千二百七十二万四千三百三十三番の人間で
「どうぞでしょう」

「いいよ、いいよ。それで行こう、と声がかかり、
被コピー人間が決まった。」

〔三十七億六千二百七十二万四千三百三十三番の男〕

ときは二〇一三年二月。山口萩男は七十三年間平凡な人生を送ってきた。個人的に見れば世の中のすべての人と同様に、さまざまなドラマがあつた。子供時代から続く父母の不仲、そんな家族でありながら大陸への移住、第二次世界大戦の後も父親の技術抑留で遅れる引き揚げ、父母の別居、大学浪人生活、転学部、留年、恋愛と結婚、教職失敗、妻の流産と長女誕生、社内抗争、娘の成長そして結婚、孫の誕

生、父母の介護、田舎脱出。しかしそういったものは誰の人生にもあることで、そのことも含めて彼の人生は平凡であつたといえる。彼の場合、彼自身や家族がたとえ困難な出来事に直面しても致命的な影響を受けずに生きながらえてきたことが、平凡と言つてしまえないところかも知れない。

オリンピックの放送で選手たちが優勝して歓喜する姿を見ながら、自分にはあのような場面は一度も

なかつたと萩男は思うのである。強いてあると言え
ば小学校のときの、地元の新聞社主催の図画コンク
ールの入賞だけである。それでも我が家では、家で
一番先に新聞に乗ったのは萩男だねと、みんなで喜
んだ。それ以外仕事の面でも、趣味の音楽の面でも
社会的に注目を集めるようなことは一度もなかつた。
何かに成功して大金を手にすることもなかつた。宝
くじの夢を追って毎週のように買い続けた時期もあ

つたが、最下等以外当選したことはない。世間の景気の良い話を横目で見ながら、中小企業の安月給の中から妻がコツコツとやりくりしながらの生活が続いてきた。三〇年近いサラリーマン生活では、一般にサラリーマンが経験しなければならないさまざまな波風を潜り抜けて何とか定年まで勤めた。小さな会社だったのが辞めるときには一応名前だけの役員になつていた。定年後は郷里に帰つて親の面倒を見な

がら、大学以来続けていた音楽を楽しんでいる。以上見てきたように、まちがいなく良くも悪くも平凡の一語に尽きる山口萩男の人生であつた。

大学以来長く続けている趣味の音楽では、バイオリンでアマチュアオーケストラや室内楽のグループに属して楽しんできたわけだが、萩男のバイオリンが特に上手いということもなかった。長く続けていたので特に下手と言うこともなく、たまには上手く

弾けて指揮者に褒められたこともあったが、それとて大学以来五〇年間で数えるほどしかない。

私生活の上でも、酒もタバコもギャンブルも女も嗜まない萩男は、この面でも小説のネタに出来るような話はない。ギャンブルはマジャンとパチンコに熱心だった一時期があったが、本来ケチか貧乏性の彼は大きく賭けることはせず、もっぱらロウリスク、ロウリターンでしか遊ばなかった。

さて前置きが長くなつたが、一通り山口萩男なる平凡な人物、さらに言えば極々平凡な年寄りの人物像を、彼の経歴から辿ってきた。そして山口萩男七十三才、光子六十八才のいま、夫婦はいくつかの室内楽的なグループに属して、平凡ではあるがのん気なで楽しい余生を送っている。彼らが特に上手くもなく、特に下手でもない現実には変わっていない。多少は上手くなりたいたいと思つて練習に力を入れることも

あるが、こう言うものは年寄りが少し練習したくらいで上達はしないものである。練習しても年をとることによる退化を防ぐのが関の山である。老人の病気の多くが、快復はしないが進行を遅くすることは出来ると言われるのと似ている。病気の進行を「止める」のでもなく「遅くする」だけというのだから情けない話である。

それでも似たような世代の、似たようなレベルの

連中との合奏はお互い年をとつても楽しいものである。山口夫妻はよぼよぼになつて弾けなくなるまで楽しむことにしている。言い遅れたが萩男はバイオリンを、光子はチェロをやっている。

萩男は二月に入つて毎晩酷い頭痛に悩まされている。そのためなかなか寝付かれない。朝出勤の必要

がないことをいいことに、寝不足を朝寝や昼寝で補っている。何故か昼間は、頭痛は嘘のように消えている。そして夜になるとまた猛烈な頭痛が襲ってくるのである。萩男はこのことを光子に言っていない。医者にも行っていない。光子に余計な心配をかけたくないと言うこともあるが、自分自身、医者などに相談してその原因が何か大変な、例えば脳腫瘍といった原因が判明することを恐れているのであつた。

そのような消極的な理由で、萩男は毎晩の苦痛を密かに耐えていた。頭痛は一週間続いたが、その後だんだん軽くなり、代わりに夢を見るようになった。夢はいつも同じような内容でとても不思議なものだった。人間とも何とも捉えがたいぼんやりした姿の、存在だけがわかるような何者かが大声で、萩男に向かって何か喚いている。声が大きすぎて聞き取りにくいのだが、何度も繰り返すのでどうやら『お前は

神になった』と言っているらしいことがわかった。大声の主はそれだけ言うとお消えてしまう。目が覚めてトイレに行ったらあと眠りに入るとまた同じ夢が出てくる。こんなことが二、三日おきに一週間続き、その後は夢も見なくなつた。萩男にはそんな夢がどうして出てくるのかわからなかつた。夢はよく前の晩見た映画の場面などと関連していることがあるが、今回の場合そうではない。しかし、そのうちに萩男

は夢のことも頭痛のことも忘れて、いつのまにかこれまでどおりの日常生活に戻っていった。

そんなことがあつてから萩男は、何となく自分の周辺でおかしなことが起きるような気がするのである。いずれも些細なことなのだが、それらはあまりにも萩男の都合の良いことばかりなのである。たとえば、コインパーキングでも数の少ない六十分百円

のところ、空いているかなと思つて行くと必ず、一枠だけは空いていたりするのである。また散歩中に向こうから大きな犬を連れ人がやつてきて、犬が怖い萩男は嫌だなと思う。すると犬連れの人はずつと横道に曲がつていくのである。やはり散歩中に、行く先の道の真ん中に大きな犬の糞がある。実に不愉快でこの日の散歩全体が嫌なものになつてしまふ。比較的マナーの良くなつた最近でもときどきこうし

て始末しない飼い主がいるのである。特に大きな犬の大きな糞の場合が多いような気がする。小さいころころした糞に比べて、大きな糞は始末しにくいからだろうか。仕方なく近づくと間違いなく犬の糞に見えていたものは枯葉だったりするのである。初めから枯葉を犬の糞と見間違えたのだとは思うが、やはり糞でなかったことを萩男は幸運と感じる。萩男のこの犬の糞嫌いは、子供のとときの体験による。小

学生のころ友達と空き地で走り回って遊んでいる最中に、ちよつと石垣の上に座り両手を後ろに着いた瞬間、ヌルツと右手の平に感じるものがあつた。まだ新しい大きな犬の糞だつたのだ。そのときの感触が何年、いや何十年経つても脳裏から消えないのである。

ちよつとした幸運は他にもある。糞ついでに言う
と、便秘気味なので今日出かけるまでに出るといい

なと思うと、まもなく便意を催して快適になることが何度もある。出かけるとき駐車場まで行ってから免許証を忘れたことに気付いて取りに戻ると、コタツが消してなかつたことに気付いたこともあった。これらは誰にもある経験で、最近憑いているなど感じる程度のことである。萩男もそう思っていた。

ところが、三月の初めに起きたことは、単なる憑

いていると言うには憑き方の度が過ぎていた。事の次第はこうである。山口夫妻は懇意になったある楽器商から、退職金をはたいてそこそこのバイオリンとチェロを買って使っていた。三月初めに久しぶりにその楽器商の社長から電話があり、いま萩男が使っているバイオリンをどうしても手に入れたいと言うあるプロのバイオリニストがいて、どんなに高額でもいいから譲ってもらえないだろうかと相談があ

ったといふのである。そのプロのバイオリニストは、アマチュアのバイオリン弾きだった父親が使つていて、あるとき手放した楽器を、たまたまインターネツトでその楽器商の取り扱った楽器のサイトを見ていて、売却済み楽器のリストの中に見つけたのであった。その楽器と言ふのが、萩男がいま使っているイギリス製のオールドバイオリンだった。バイオリニストの父親はもう高齢でバイオリンを弾いていな

いそうなのだが、娘としては父親が弾いていたその楽器の音色に魅せられて自分もバイオリンを始めたと言ういきさつもあつて、父が生きている間にもう一度その楽器を手元におきたいと思つたのである。

楽器商の社長は、

「すでに愛用していただいているお客さまに、それを買戻させてくれとは言えないことはわかつた上での相談なのです。もし山口様が私どもの無理なお

願いに協力していただけるのなら、私どもとしましては出来るだけの埋め合わせをさせていただく用意がございますが、いかがなものでしょうか」

と丁重な言い方である。萩男はそのバイオリンを購入入してからすでに四年になる。ようやくこの楽器の鳴らし方がわかってきたところだったし、音だけでなく姿かたちにも愛着がわいてきていたので、そんな気はまったくないと即座に答えた。ところが社長

は簡単には引き下がらない。

「実はその方は私どもの大切なお客様で、もちろん山口様もまったく同様に大切なお客様なのですが、何とか双方がメリットになるような解決方法はないかと考えております。どうかご一考をお願いできないでしょうか」

「その解決方法というのは何ですか」

「まず山口様のいまの楽器はご購入いただいた五〇

○で引き取らせていただいて、その代わりにいま私どもで在庫しております八九〇で出しておりますフランスの楽器を送らせていただくということです。それにはそのお客様も協力してくださるということなのです。もちろん山口様のご負担はありません。このフランスの楽器は一八六二年の製作で、私どものホームページの在庫一覧にも出しているものなのでお確かめいただけます」

確かに良い条件である。五〇〇万と八九〇万ではかなりのクオリティの差があるはずである。楽器に慣れるまでにはまたそれなりの時間がかかると思うが、自分の場合は、プロとして演奏活動が続けていくわけではないので、それは楽しみながら慣らしていけばいい。萩男は楽器商の提案を了承した。楽器商の社長は喜んで、すぐに輸送用の木箱で送るから、その木箱とケースに萩男の楽器を入れて送り返せば

いいように手配すると言った。

萩男は早速インターネットを開いて楽器商の言う在庫一覧を見た。八九〇万のフランスのバイオリンはすぐに見つかった。今の楽器に比べると明るい色の楽器だった。写真を見たことで萩男は新しい楽器への期待が膨らんだ。三日後、楽器が届いた。すぐにその宅配の運送屋に自分の楽器を託けるため、萩男はその場で木箱を開き、その中に収められている

バイオリンケースを開けた。明るい色のニスが眩しく光るバイオリンが姿を現した。それは光の加減で金色に見えるところもある。美しい楽器である。運んできた運送屋の若者も、

「綺麗なものですね」

とまじまじと見ている。重厚な濃い茶色で時に金色が混ざったような赤に見える萩男の楽器も良かったが、それに勝るとも劣らない姿の楽器であつた。し

かしいまは運送屋が待っているので、感慨に浸るのは後にして指示されたように自分の楽器に別れを告げてケースに収め、そのまま配達してきた運送屋に託けた。

新しい楽器には手紙が添えられていた。楽器をどうしても譲ってほしいと言ったバイオリニストからの礼状だった。それにはおよそ次のようなことが書かれていた。

『・・・大變勝手なお願いを聞いていただいて本当にありがとうございました。・・・高齡の父が一旦手放した楽器をどうしてもまた手元に置きたいと言ひ出したので、先行き長くない父の願ひをかなえたいと思ひお願いした次第です・・・父はあの楽器をイギリスで購入したと言ふことですが、私が生まれたときにはすでに弾いていたものです。私は父が弾くあの楽器の音を聞きながら育ち、自分もバイオリンを

弾きたいと思うようになったのです・・・私はこのたびの身勝手なお願いを聞いていただきただいとお礼に、ストラックさんにある最高のバイオリンをあなた様に代替品として差し上げるようにお願いしました。それでも、私もバイオリニストとしてよくわかるのですが、一度愛着を持った楽器と言うものは誰になんと言われようと手放したくないものです。それは父がすでに弾かなくなっているにもかかわらず、も

う一度手にしたいと言うのにも同じ気持ちなのだと思えます。

もしあなた様が新しい楽器にどうしても馴染めないようでしたら、父が必要ない状態になったときには、それをふたたびあなた様のところにお送りさせてもらってもいいと考えております。その場合は一切金銭的なご負担なしに二つの楽器をお持ちになつていても構いませんし、一つをお売りになるなどさ

れても構いません。しかし、もし新しいフランスの楽器がお気にいるようでしたら、私も父が愛した楽器を手元に持っていたいと思いますので、そうさせてください。……」

丁寧な長い手紙であつた。萩男はこれを読んで、バイオリニストの金銭に代えがたいと言う思いを読み取つて、要望に応じてよかつたと思うのだった。自分も新しい持ち主に対して何かコメントして置け

ばよかつたと思つた。

萩男はバイオリンが着いたときにすぐに弾いてみたいと思つていたのに、バイオリンニストからの手紙をよみ、その感慨に浸っている間、弾くことを忘れていた。我に返つて新しいバイオリンを取り上げた。これまでの楽器もよく乾燥した軽さであつたが、これも軽い。そして楽器商ストラックの気持ちがあつたがこもつたようによく磨かれていた。音を出してみた。柔

らかい中音域、輝かしい伸びのある高音域、力強い低音域と申し分ない。楽器が着いてからずっとそばで眺めていた光子も思わず、「凄い」と叫んだほどだ。萩男はしばらくいろんな曲を弾いてみた後、住所がわからないので楽器商経由で新しい持ち主に手紙を書くことにした。なにしろ単純計算で三八〇万余分に出してくれたことになるのだから、一言あつて当然だと考えたのである。萩男は、新しいフランスの

楽器が素晴らしいこと、これを是非弾きこなしたいと書いた。

「コピーか移転か」

新しいバイオリンは、萩男の練習意欲を掻き立てた。そのバイオリンは世界的なバイオリニストのヒラリン・ハリーンの音に似ていることから、萩男は

彼女のように弾きたいと強く思うのだった。彼女はストラディバリウスも持っているが、フランスの名器であるビヨームを好んで使っていると聞いたことがあり、同じフランス製のしかも同時期の作品とあって似ていることがいかにも根拠があるように思われたのである。萩男の新しい楽器の中にはビヨームとは違うラベルが貼ってあった。本物のビヨームなら一千万以下では手に入らない。そのようなことを

思いながら、萩男はバッハを弾き始めた。驚いたことに楽譜を見ていない上に、まったく覚えていないはずなのにすらすらと弾けるではないか。しかもC Dで聞いたハリーンと同じように素晴らしく弾けているのである。萩男はプレリユードが終わると続けてル―レを弾き始める。そばで聞いていた光子は目を丸くして言葉も出ない。萩男が弾くバッハは光子も好きなハリーンの演奏そのものようではないか。

とうとう萩男はバッハの無伴奏バイオリン・パルティータの六つの楽章を最後まで弾ききってしまった。そもそもこれは好きな曲ではあつてもアマチュア、それも萩男レベルの者にとつては高嶺の花で、とても手の出せる曲ではないのだ。それを楽譜もなしにいきなり弾ききつたのである。これは紛れもなく奇跡以外の何ものでもない。二人は喜ぶよりも驚きとある種の恐れさえ感じてその場に座り込んでしまつ

た。しばらくしてから光子が口を開いた。

「もう一回弾ける？」

「弾けるような気がする。他の曲でも大丈夫かもしれない」

萩男の返事にはとてつもないことに巻き込まれたような不安の響きがあった。おそるおそる楽器を構えると同じバツハの、有名なシヤコンヌを弾き始めた。長年バイオリンをやっていたのに、その難しさから

一度も弾いたことがない曲だ。萩男は十五分もかかるシヤコン又を最後まで完璧に弾ききった。

「魔法のバイオリンじゃないの、これ」

光子が大声で言った。確かにそうかもしれないと萩男も思った。現実の世界にそんなことがあるのだらうか。しかしそれ以外に考えられない。最近自分の楽器を何度も弾いているが、こんなことは一度もなかった。それにバッハを弾いてみようと思ったこと

もなかつた。もしかしたらいままでの楽器でも弾けたのかもしれない。萩男はそんな気がしてきた。

その翌日も萩男は弾きたいと思っただけでどんな曲でも弾けるのだつた。弾きたいと思うと、あまりよく知らない曲でも知っている曲と同じように頭に湧き出てきて弾けてしまう。萩男はだんだん自分が自分でなくなっているのではないかと感じ始めていた。

次の合奏団の練習日、萩男は誰かにバイオリンを借りて弾いてみたり、この魔法のバイオリンを誰かに弾いてもらったりすることにした。

練習場で萩男は新しい楽器を手に入れたことを披露した。大変高価な楽器だが、ひよんなことで自分の楽器と交換したことも話した。

「ちよつと弾かせて」

と言つてきた人には気軽に試し弾きを許した。はじ

め高価な楽器といわれて遠慮していたものも、一人が弾くとわれもわれもと順番待ちしながら試し弾きしはじめた。それを聞く限りではみなそれぞれの一言で言えばいつもの下手さでしか弾かなかつた。萩男は、やはり魔法のバイオリンではなかつたのだと思つた。その間に、萩男はある団員の楽器を借りて弾いてみた。楽器が萩男の家に着いたとき最初に弾いたバツハを試してみた。その団員の楽器は特に

いいものではなかったが、それでも萩男の見事な演奏でそこにいた全員が萩男の方を振り返って聞き始めた。いつもの萩男は、下手なアマチュアのくせに比較的高価な楽器を使っていたので、たまには良い音も出していたが、いま他の団員の楽器による萩男の演奏はそういう問題ではなく、弾き方そのもののレベルが格段に高いのである。もちろん萩男がそのように上手いアマチュアでなかったことはみんな知

っている。楽器が着いたとき萩男の演奏を聞いたときの光子と同じような状態でみんな呆然としている。しばらくしてから我に返った団員の一人が、萩男に向かつて自分の新しい楽器で弾いてみなさいと言つて、萩男が手にしている団員の楽器の代わりに、新しい楽器を萩男に戻した。萩男は比較のために同じ曲を弾き始めた。練習場の中にはまるで世界的なバイオリンスト、光子に言わせるとあのハリーンがこ

の場に来て弾いているかのような音楽が鳴り渡った。

萩男がどうしても急に世界的なレベルの演奏をするようになったのか誰にもわからないまま月日がたつていった。この合奏団は、年一回開かれているあるアマチュアの室内楽団の合同発表会に参加している。そこでは出演団体に三十分の持ち時間がある。今年の出し物として通常の合奏曲の間に一曲萩男のソロ

を入れることになった。もちろんこの不可解な事件を受けたものである。萩男はバッハの無伴奏のプレリュードを弾くことにした。

発表会は出演する団体のメンバーがお互いに聞きあうのが主で、一般の聴衆はほとんどいないのが毎年の例であった。それぞれが知り合いを誘うくらいで、毎年響きの良いホールで開くのだが、客席はガラガラ状態である。それでも趣味を同じくする者同

士が聞きあうのは演奏する側としてはそれなりの緊張感があり、張り合いもあるものなのだ。

今年は萩男のバッハ演奏があるといっているので合奏団のメンバーの一人が、自分がレッスンを受けている先生に是非聞いてほしいと誘ったのだった。当日その先生は約束どおり聞きに来てくれた。合奏団の出番は後の方だったので、先生は他のグループの演奏を二時間も聞いてからやっと目的の合奏団の演奏に

たどり着いた。なにしろアマチュアのグループばかりなので、先生としては根気よく待ってくれたのである。合奏団はまず十分くらいの合奏曲を演奏した。バイオリン・パートに一人非常に魅力的な音色と、音楽的な歌い方をする奏者がいることに先生はすぐに気付いた。そして案の定その奏者がソリストとして一人真ん中に進み出て楽器を構えた。頭の禿げ上がった風采の上がらない老人にしか見えなかったが、

さきほどからただ一人素晴らしい演奏をしていたので、先生は演奏が始まるのを期待して待った。

驚くべき演奏であつた。

この先生は下野雅貴とって、非常に聞くものの心に訴えかける演奏をすることで知られておりファンも多い。下野は二か月に一回自分のリサイタルを開いているのだが、そのリサイタルに萩男をゲスト

として招くことにした。平凡な人生を歩んできた萩男にとって、生涯初めての晴れ舞台といえるものであった。萩男としてはいつも同じ曲になるので、別のものにしたかったが、下野は先日発表会で弾いたバッハの曲を全曲弾くように希望した。それで生涯初めての晴れ舞台での演奏曲はバッハの無伴奏バイオリンのためのパルティータ第三番と決まった。

下野がそれとなくPRしたためか、当日は地元の

テレビ局が来ていた。下野のリサイタル始まって以来のことである。そして翌日のニュースで

「彗星のごとく現れた初老のスーパースター」と題したニュースとして演奏の一部と下野のインタビューが流れた。萩男もインタビューを求められたが辞退したため、下野だけがインタビューされたのだった。演奏部分は一分程度しかなかったもので、ニュースを見た者は上手いとは思っても、驚異的とま

では感じ取れなかつたかもしれない。しかし下野がインタビューで、萩男の演奏は間違いなく世界の第一級であり、一人のアマチュア演奏家がどうしてこのような演奏を実現するのか自分には理解できないと言ったことは大いに話題になった。

下野のリサイタルを取材したテレビ局は、地元のニュース番組に萩男を呼んで演奏とインタビューを組んだ。演奏ではリサイタルのときと同じ曲のプレ

リユードを全曲弾いた。四分弱聞きとおしたことで、この放送を聞いたものは萩男の演奏の凄さを実感した。インタビュアーの部分では、どうして弾けるのかわからないということばかり萩男が繰り返すので、聞いているものも何のことかわからなかった。しかし頭の禿げ上がった七〇過ぎの定年退職して十年以上の風采の上がない老人の姿かたちと、演奏された若々しく躍動的で美しい音楽とのギャップの大き

さには一様に衝撃的な驚きを禁じえなかつた。

この放送は系列の中央局でも注目されて、全国版として再放送された。これでいっぺんに全国的な話題として広まり、各テレビ局、新聞社、雑誌社の取材が殺到して萩男は一夜にして時の人となつたのであつた。その取材の中の記事の一つに、一曲だけ上手く弾いたからと言つて騒ぎすぎだというものがあつた。萩男はそれを書いた記者に何曲でも聞かせて

やりたいと思つたものだ。しかしそんなことをしなくても耳のあるものはちゃんといふものである。あの音楽事務所から、是非自分のところと契約してくれとの申し出があつたのである。そのとき萩男は、一曲だけで契約なんかして大丈夫なのかと皮肉っぽく聞いたものだ。

音楽事務所はまずコンサートを開くことを提案してきた。まずは地元広島で開き、次に東京で開くと

いう二段構えであつた。やはりいきなり東京でと言うのには少し躊躇があつたのかも知れない。そんな必要はないのにと、萩男は思った。

広島も東京も同じプログラムで、バッハの無伴奏バイオリン・パルティータとソナタ六曲の中から三曲であつた。広島の演奏会は、演奏の素晴らしさで大成功だったが、会場は満席ではなかつた。東京では、広島の評判も伝わったためか立ち見の出る盛況

で、演奏は圧倒的な感動を持って迎えられた。その結果東京では追加公演が行われた。追加公演で同じバッハの無伴奏から残りの三曲が演奏されたことがさらに話題を沸騰させたのであった。しかしいずれの演奏会でも萩男は何の変哲もないユニシロで買った黒ズボンに黒シャツで舞台上上がった。黒い革靴も少しくたびれかかっていた。

旅行先で急遽決まった追加公演では無精ひげのま

までさえあつた。しかしおかしなもので、そのことさえも萩男の評判を高めることはあつても下げることとはなかつた。演奏後のサイン会でも長い列が出来、若い女性は萩男に握手を求めた。

演奏会が終わってホテルで一人になると、別世界から帰ってきた浦島太郎のように演奏会での自分と、いまホテルで一人居る自分とは別人のような気がするのだつた。

音楽事務所からはレコーディングの提案があり、
バッハの無伴奏六曲を二枚組みで出すという。それ
に合わせてある富豪からレコーディングに使用する
楽器としてストラディバリウスの貸与が持ちかけら
れた。そのような楽器は素晴らしいに違いないが、
弾きこなすのに時間が必要だと聞いていた萩男は一
旦辞退したが、このようなレコーディングに一千万
もしないような楽器を使う者なんかいないと言つて

説得された。レコーディングは一か月後に東京のスタジオで行われることになった。

〔神々の失敗〕

一週間後、音楽事務所から急いで上京できないか
と言う依頼があつて、萩男は上京した。事務所の応
接室には見まがうこともない憧れのヒラリン・ハリ

ーンがバイオリンケースを抱えるようにして座っている。しかもハリーンが萩男に会いたいというので上京してもらったというのだ。萩男が部屋に入っていくと、ハリーンは立ち上がって萩男に近寄って握手の手の手を差し出した。萩男は憧れのハリーンと握手したことで感激した。柔らかく暖かい手であった。女性にしては手が大きいとも思った。

しかし自分がどれほどのものなのかまだ戸惑って

いる萩男は、ハリーンに引き合わされると言う状況が理解できなかつた。英語のわからない萩男に事務所の方が通訳をしてくれた。ハリーンはこれまで来日したときにはこの事務所主催のコンサートを行つてきたのだつた。実は先日の追加公演に際して、事務所の所長がハリーンに、あなたのように弾く男が居るから聞きに来ないかと誘つたのだそうだ。それに応じて彼女は萩男の追加公演を聞いたのだつた。

そしてこの日の会合となつたのだつた。ハリーンは美しい女性であつたが、事務所で対面した彼女は心なしか元気がないように見えた。また見方によつてはのんびりしている風でもあつた。事務所の所長の話で萩男は初めて聞いて驚いたのだが、ハリーンは引退したというのだ。いつかと聞くと、数か月前に突然バイオリンがまったく弾けなくなり、あらゆる治療を試みたがまったく効果がなかつたというのだ。

身体も心も何一つ異常ないのにバイオリンの演奏だけが原因不明のまま弾けないのだそうだ。まだ治療を完全に諦めたわけではないが、今回の萩男のレコーディングにはぜひ自分のビョームを使ってほしいと思い、わざわざアメリカから日本まで届けにきてくれたという。萩男にとっては涙が出るほど嬉しく光栄な話である。でもなぜそこまでしてくれるのか聞くと、少し寂しそうな笑顔で、

「先日聞いたあなたのバッハがあまりにも私の演奏に似ていたからです。所長からレコーディングの話を書いて、弾けなくなつた私のバッハを記録として残してもらおうような気がして、バイオリンを使ってもらうことを考えたのです」

そう言うってからハリーンは抱えていたケースから彼女の愛器であるビヨームを取り出して萩男に渡した。弾いてみるというのである。萩男は言われるままに

バッハの一部を弾いた。ハリーンは素晴らしいと褒めた後、萩男ならすぐに弾きこなせるから大丈夫と太鼓判を押したあと、一、二この楽器の癖を説明した。そしてこのビヨームはストラディバリウスよりも状態が安定していて扱いやすいといった。だから自分もスタジオでの録音ではこれを使うことが多いと言った。萩男はある富豪がレコーディングのために貸してくれたストラディバリウスのことが気にな

ったが、所長がレコーディングはハリーンのビョームでやりなさいと断言したのでそうすることにした。

レコーディングまでの間萩男は広島に帰っていつものような生活を送っていた。いまや世界に知られる演奏家になったわけだが、いつものように合奏団の練習にも出かけて行っていつもの仲間と一緒に合奏を楽しんだ。ただ一度恐ろしい体験をした。車で

走っているとき、猛烈な勢いで追いついてきて、レースカーのように追い抜き、さらに前の車たちを縫うように爆音を轟かせて走り去る車があった。萩男は隣で

「こわいねー」

と言っている光子に、

「あんな奴は一人で電柱にでもぶつかって死ねばいいのに」

と吐き捨てるようにつぶやいた。そのとき遙か前方で大きな衝突音がして埃が巻き上がるのが見えた。急に車の流れは遅くなりやがて流れは止まった。交通事故らしい。徐行しながらそこを通り過ぎると、さっきの暴走車がコンクリートの電柱に衝突して大破している。運転していた男はまだ車の中に居るらしいが動きがない。萩男たちは嫌なものを見た不快感でその場を通り過ぎた。

「お父さんが、あんなこと言ったからよ」
光子が小さな声で言った。萩男は、ぶつかって死ねばいいと言ったことを思い出した。

同じ日にもう一つの出来事がなかったら萩男はそれほど気にしなかつただろう。それは事故を見た後行った練習で、いつも和気藹々と合奏を楽しんでいく楽団だが、一人だけ面倒くさいことを言ってみんなを困らせる団員がいる。この日はその男の姿が見

えない。萩男はあんな面倒な奴はもう来なければいいのと思った。休憩時間にある団員からその団員は退団したと聞かされた。

萩男はこの日の午後、続けざまに思ったとおりになったことで、頭痛のあと何となくいろいろなこと
が思い通りになると感じていたことが、はつきりと
一本の線のように繋がっていることに気付いたので
ある。最大の疑問だったバイオリンが世界レベルで

弾けるようになってきていることも、ハリーンのように弾きたいと思つたために起きた奇跡ではないかと考へると説明がつく。もちろんそんな奇跡があると仮定した場合である。萩男はハリーンが数か月前に急に演奏が出来なくなつて、その原因がまったく不明のままだと言つていたのを思い出した。自分は、ハリーンのように弾きたいとは思つたが、ハリーンが弾けなくなることは願つていない。やはり一本の線

ではないのだろう。まさか自分がハリーンのように弾きたいと思っただけで、ハリーンが持っていた音楽と演奏技術がすべて萩男に移転してしまうと言うようなことは想像もできない。萩男が、突拍子もない想像として仮定するのはせいぜいコピーされることであり、移転ではなかつた。もちろんコピーでさえも理解の範囲を超えている。

現実的かどうかは別として、萩男が脳の研究とし

て想像できるのは、テレビか何かで見たような場面である。つまりハリーンと萩男が病院のベッドに並んで寝かされていて、二人の頭は無数の線で結ばれていて、何人もの研究者か医者たちが計器を見ながら何かを操作している場面である。その場面も能力や技能のコピーや移転ではないと思う。

レコーディングの打ち合わせなどで忙しい日々が

続き、奇跡の原因を考えたりする余裕もないまま、レコーディングのときが来た。三日間で六曲の録音を済ませ、その合間にジャケットの写真撮りや、演奏者の言葉を書くなど結構忙しい日々であつた。最終日は遅くなつたので、萩男は用意されたホテルに泊まつて、翌日広島に帰ることになつた。

萩男はホテルでひとりになつてからハリーンのことを考えた。彼女が弾けなくなつた時期と、自分が

弾けるようになった時期が一致している。もしかしたら自分が彼女の能力を抜き取ってしまったのかも、しれないと考えると、萩男は世界の宝ともいえる大演奏家に大変なことをしてしまったと思った。しかも彼女はまだ若い。自分は老い先短い。萩男は、彼女が何とかして演奏能力を取り戻すようにと願った。自分がそう願うことで、彼女に演奏能力が戻るのだ。したら、それによつて自分がもとの下手なアマチュ

アに戻っても構わないと思った。そう思うと気持ち
が楽になつて、その夜はゆつくりと眠れた。

翌朝萩男は音楽事務所を訪れた。所長は不在だつ
たので、事務員にハリーンにバイオリンを返すよう
に頼み、自分はもう演奏をしないことを所長に伝え
てもらふように頼んで、広島に帰つた。

家に帰つてからこつそりとバイオリンを弾いてみ
た。明らかにもとの自分に戻っている。萩男はこれ

でいいと思った。そして光子に事情を話した。光子もあの交通事故と、面倒な団員の退団のことがあつてから、何となく不思議な出来事の繋がりを感じていたので萩男の判断に賛成した。

一週間後音楽事務所の所長から、三回のコンサートのギャラとレコーディングのギャラを振り込んだとの知らせがあつた。さらにCDは売れた枚数だけ

印税が入るとしてあつた。そしてハリーンにバイオリンを返したことが書いてあつた、萩男たちがもつとも嬉しかったのはハリーンが演奏を再開したと書いてあつたことである。その手紙の簡単な記述によると、ハリーンは、ある日突然元のように弾けるようになったと言ふのである。最後に萩男がもう演奏しないといったことに触れて、自分としては非常に残念だが、萩男の意思でそうするのであれば、その

意思を尊重するとあつた。おそらく所長としては、コンサート・プレーヤーの生活の大変さを知り尽くしているからだろうと、萩男は想像した。

〔萩男に残る神の力〕

ハリーンに関することは無事おさまり、短い期間ではあつたが、萩男には、世間を驚かせた三回のコ

ンサートと、ハリーンが自ら提供してくれた楽器で録音したバッハの六曲のCDが残った。

しかし萩男には他人の運命を左右するような、神のような力が残っていた。萩男にはうかつなことは思い浮かべるわけにいかないというプレッシャーが重くのしかかっていた。ハリーンのこととで明らかかなように、地球上何処にいる人間の運命も萩男がこうしたいと思うだけで自由に出来るのである。政治的

信条の違ふ政治家を抹殺することも出来るかもしれないのである。あるいはカダファイ大佐を死なせることも出来るかもしれない。カダファイの場合でさえ自分の浅い考えで死なせていいとは言ひ切れない。神が気軽に人の運命をもてあそんでいるとも思えない。萩男は神であることを返上したかった。一度返上を強く願つてみた。そのあと散歩で上空のカラスを見て、いますぐ墜落しろと思つてみた。カラスは目

の前で墜落した。萩男は返上でできていないことがわかった。

萩男が家でぼんやりテレビを見た。画面には韓流ドラマの番組コマーションタルが流れていた。それを見て、かつてはあれほど繰り返し放送されていた《チヤンチヤンの誓い》はまったく話題も出なくなつたなど思った。萩男はチヤンチヤン役のイー・ヨイネ

のファンだった。そのときぼんやりしていたので、一時的に自分が神であることを意識していなかった。それで、イー・ヨイネが現れて自分のことを好きだと言わないかなと思ったが、そのままうつらうつらして眠ってしまった。

目が覚めるとトイレに行き、そのまま練習室の入ってバイオリンを弾き始めた。奇跡が起こる前の萩男の素人っぽい演奏である。練習中に、さつきイー・

ヨイネが自分を好きだといつてくれないかなと思つたことを思い出した。早く取り消しておかないとハリーンのときのように大変なことになる。だがどう言つて取り消せばいいのかすぐに思いつかない。萩男は練習を続けながら考えることにした。そうしているうちに夕飯の支度をしていた光子が練習室に入つて来て、

「一時間くらい《ハープ》を合わせない？」

と言う。《ハープ》と言うのはベートーヴェンの弦楽四重奏曲 第十番のことで、萩男夫婦が、もう一組の夫婦といま練習している曲だ。近いうちにそれの合わせ練習があることになっている。二人は第一バイオリンとチェロだけの合わせ練習を始めた。こういう練習はあつという間に時間が経つ。二人は一時間半くらい練習して終わりにした。萩男はイー・ヨイネの件をすっかり忘れてしまっていた。

夕食後二人は毎日見ている二時間のニュース番組をみた。この日はTPP交渉参加に関するニュースで、政権党内部の反対派と首相との意見の違いについて熱っぽい議論がされていて、二人とも夢中で見ている。番組が終わってからチャンネルを回していたが面白そうなのがないので、少し早いが寝ることにした。一か月以上御無沙汰だった夜の営みをしてぐっすりと眠った。

朝早く目が覚めた萩男は、イー・ヨイネのことを
思い出した。もうだいぶ時間がたつてしまっている。
萩男は少し開き直つて、もちろん見ず知らずで、一
般人である萩男は世の多くの男性と同じ思いで彼女
の清純な美しさに憧れているが、イー・ヨイネから
見れば、《チャンチャンの誓い》が放映された国と地
域の無数の人たちが見ていて、自分の人気が男性だ
けでなく女性のファンも多いことはよく知っている。

砂漠の中である特定の砂粒を見つけ出すように、彼女が萩男にめぐり合い、しかも平凡な高齢の一人の日本人を好きになることがありえるとは到底思えなかつた。ハリーンするときも、あのような展開になることは想像もしていなかつた。しかし現実には起きた。萩男はそのことを忘れていた。

萩男は開き直って、神がどうやって砂漠の中の砂粒に彼女を行き当たらせるのか、お手並みを見てや

ろうと思った。つまり、イー・ヨイネが自分の前に現れて好きだと言ってもらいたいとの思いは取り消さずにそのままにしておくことにしたのである。

天気予報で等圧線を動かしながら先の天候を解説するように、世の中と言うものはアメーバーの動きのように変幻自在に動きえるものだということを甘く見ていたことが間もなく明らかになるのだった。

合奏団にグルメのおばさんがいて、グルメ仲間としよつちゆうグルメ旅行をしていた。グルメおばさんが練習場で今度は中国か韓国に美味しいものを食べに行くと言う話をみんなに吹聴していた。彼女はこれまでもときどきそういう話をしていたので、萩男はまたかと思いつながら聞いていた。ところがこのたびは、

「山口さんも、ご夫婦で行きませんか？」

と振つてきた。これまでに一度もなかつたことである。

「いったいどうしたの」

光子が聞き返すと、

「実はこんどのは、ただの食べ歩きじゃなくて、向こうでちよつとした演奏会をすることになったの。それでお宅のお二人と菅さんと私とでカルテットが出来ないかと思つて」

演奏というのは、ソウルのあるアマチュア音楽団体が主催する室内楽フェスティバルに参加応募したら、当たったというのである。毎年国籍を問わず多くの参加希望があり、抽選で参加団体を決めているのだそう。

こんな事情で、山口夫妻は心ならずも参加することになったのであつた。出発は一週間後だったので、急ごしらえのカルテットは出し物をモーツァルトの

《不協和音》と決めて猛練習に取り組んだ。平日が空いている四人は、毎日集まって練習した。練習を始めて三日目になつて、ちよつと曲が難しすぎると言う意見が出た。実はグルメおばさんは、萩男の奇跡的な名人ぶりのイメージが頭にあつて、向こうに行つて聞くものをアツと言わせようという魂胆があつたのである。しかしハリーンに能力を返してしまつた萩男には、もとのパツとしないアマチュアの技

術しかない。楽器だけは事件のおかげで何ランクかクオリテイーの高いものに変わっているが、それだけではどうにもならないのである。グルメおばさんはビオラを弾きながら、こんなはずではなかったのにと首をかしげて、バイオリンの菅さんと顔を見合わせた。しかしどうして下手に戻ったのとも訊けなかった。四人は折角二日間練習してきたが、人前で弾くにはお粗末過ぎると言うことで、曲をモーツァ

ルトの初期の四重奏曲に変えた。俗にイージー・カルテットと言われてアマチュアに愛好されている曲の中の一つである。イージーと言つても、シンプルに書かれているために比較的音を取りやすいと言うだけで、本当に音楽的に弾くのは、《不協和音》と違いはない。それはみんなわかつていたが、音もまともを取れないのでは話にならないので仕方なかった。残りの四日間懸命に練習した。この曲をこんなに真

剣に時間をかけて練習したのは初めてだった。

弾けないから曲を変えようと言う話が出たとき、萩男は四人がハーゲタ四重奏団のように上手くなつたらいいのと言う考えが、一瞬頭をよぎったが慌てて打ち消した。こんどは、いま世界中で引つ張らだこのハーゲタ四重奏団の技術をスポイルでもしたら大変である。

「まあ、これくらいなら何とかなるでしょう」

グルメおばさんは、みんなに言った。こうして準備を整えた四人は二泊三日のソウルへの演奏とグルメのたびに出かけた。

一旦ホテルに入った一行は、そのよるリハーサル
の行われるフェスティバルの会場に、ぶらぶら歩き
で出かけた。その帰り、おばさんたち三人はショツ
ピングがしたいと言って、途中にあつた大きなショ

ツピングセンターに寄ると言い出した。興味の無い萩男は先にホテルに帰ることにした。

一人になつた萩男がホテルに近づくと、人だかりがしている。ホテルの玄関の上のポーチに人がいて、カメラを構えている。その真下のホテルの前では何やら撮影をしているようだ。萩男が背伸びして見ると、綺麗な女優がカメラの前でライトを浴びて撮影されている。女優がイー・ヨイネであることはすぐ

わかつた。萩男はドキドキしながら人垣を掻き分けて最前列まで出て行つた。掻き分けられた人たちは何をするのだといつた風に萩男を睨んだり、前に行かすまいと抵抗したりしたが、萩男は火事場の馬鹿力のような勢いで進んだ。最前列には縄を張つた警備員が何人もいて見物の輪が小さくなりそうなのを必死で防御していた。その中で、周囲のざわめきとは無関係なように爽やかな笑顔でポーズを変えなが

ら撮影は続いていった。そのとき真上でガタガタと音がしたかと思う間もなく、

「あー」

と言う声とともに、カメラと人がイー・ヨイネめがけて落ちてくる。彼女の近くにいたスタッフが彼女を落下物から遠ざけるために覆いかぶさるようにして庇った。自らを犠牲にした素早い行動だった。落ちてきたカメラマンはイー・ヨイネを庇っているス

タツフの男の上に落ちた。そして一緒に落ちてきた三脚とテレビカメラは一旦石のタイルに落ちて跳ねると最前列にいた萩男目がけて飛んできて、胸を激しく打った。萩男は激痛に屈み込んだ。あまりの激痛で意識が朦朧とした萩男が次に目を覚ましたとき、病院のベッドに寝かされていた。一人部屋で誰もいなかった。しばらくして、廊下に複数の足音と小さくささやく声がして、病室のドアが開いた。イー・

ヨイネと看護師のほか二人の男が一緒だった。イー・ヨイネは自己紹介をしてから、大変なことになってしまつて申し訳ないと、通訳を通じて萩男に謝つた。彼女が謝るべきことだったのかわからなかつたが萩男は、お言葉を感謝すると、かすれる声で通訳に伝えてもらった。声を出そうとすると、胸が激しく痛んだ。イー・ヨイネはさらにケガの状態はどうなのかと萩男に訊いたが、萩男はわからなかつた。

そばの看護師が答えた。萩男には言葉がわからなかつたが、イー・ヨイネはいかにも気の毒そうな顔で萩男を覗き込んだ。彼女は少し男たちと話していたが、萩男に向かつて、おそらく

「お大事に」

と言う感じの言葉をかけて立ち去った。萩男はカメラが当たった胸が痛かったが、イー・ヨイネは本当に美しい人で、優しく話しかける態度にも感激する

のだった。

機嫌よく買い物をしてホテルに帰ったおばさんたちは、事情を聞いて病院に駆けつけて来た。萩男がケガの状態をまだ医者から聞かされていないことを知って、光子が医者に来てもらうように頼んだ。かなり時間が経ってから治療を担当した医者が通訳らしい男を連れて萩男の病室にやって来た。

説明によると萩男のケガは、落ちてきたカメラに

よるもので、肋骨が五本折れて、折れた骨の一部が内臓を傷つけていると言う重症であつた。光子が、このまま日本に連れて帰つて、日本で治療することは出来ないかと医者に聞いたが、医者はいま動かすことは出来ないし、出来るだけ早く手術が必要なもので、ここで治療すると言つた。光子は当然そうなのだらうと思つたが、費用がどうなるのか心配になつてきた。もちろんいまは持ち合わせもない。それに

については、すべて事故を起こした撮影会社が責任を持つので心配はいらないとのことであつた。

今回の演奏はキャンセルとなつてしまつた。もちろんフェスティバルは、事件とは関係ないので予定通り行われる。萩男の入院はしばらくかかるらしいが、医者が言うには命に別状はないらしい。萩男がケガのわりに元気そうなので、おばさんたちは安心した。

おばさんたちは、フェスティバルを見て、美味しいものを食べて予定通りの便で帰国することになった。もちろん光子だけは萩男のそばに残ることになった。

夜遅くなつてから光子は、何か探して食べてくると言つて出て行つた。しばらくしてドアが開くと、イー・ヨイネが一人で入つてきた。半そでのブラウスを着ていたが、右腕の肘から手首にかけて包帯が

卷かれている。萩男がそれを指差すと、イー・ヨイネは笑顔で頷きながら、

「イエス」

と答えた。彼女はそばの椅子を引き寄せて、ベッドのそばに腰掛けた。言葉が通じないことがわかっていのか、黙って静かな笑顔で萩男を見ている。相変わらず胸の痛みはかなり酷かったが、萩男はこんな美しい人を見たことがないと思った。まもなく先

ほどイー・ヨイネと一緒にいた二人の男のうちの通訳をしていた方が入ってきた。イー・ヨイネとその男は何ごとか話していたが、男が萩男にいった。

「このたびは本当にすみませんでした。病院の費用やその他必要な費用はすべて私ども関係者で支払いますので、あなた様は安心して治療に専念してください」

萩男は、わかりましたと言うようにイー・ヨイネに

頷いて見せた。彼女も笑顔でそれに答えた。萩男が彼女の包帯を指差して通訳の方を見ると、彼は意味がわかったと見えて、それは昼間の事故のときケガをしたものだが、軽いので心配はないと説明した。また萩男とイー・ヨイネは笑顔で頷きあった。言葉がわからないのでそれしかしようがなかったのだ。そうしているうちに光子が部屋に戻ってきた。腰掛けていたイー・ヨイネは立ち上がって挨拶した。萩

男がかすれ声で、

「マイワイフ」

と言うと、通訳の男を通じて、先ほどと同じことを光子にも説明した。

イー・ヨイネは、こんな目にあつたことを怒つていないのかと聞いた。萩男は、故意ではなく事故なのだから、むしろ落ちた方も大変だつたと思うと答えた。イー・ヨイネは何と優しい心の方だろうと言つ

た。そして、美しい表情で萩男を見つめた。光子は女の勘で、イー・ヨイネのその視線に見捨てられない雰囲気を感じた。イー・ヨイネが何時までも立ち去らないので、光子は、

「主人を休ませたいので今日はそろそろお引取りください」

と通訳に伝えた。萩男は折角見舞いに来てくれているイー・ヨイネに対して何ということをするのだと

思った。しかし、その後ずっと不機嫌な光子を見て、理由がわかった。仮にイー・ヨイネが自分を好きだといつても、光子と別れてイー・ヨイネと一緒にいることなど出来ない。出来たとしても幸せではないだろうと考えた萩男は、イー・ヨイネがこれまで通り万人の恋人であるように願った。

その翌日、イー・ヨイネからの伝言と花束が萩男のところへ届いた。それには、

「撮影のため遠方に行くことになったので、もうお会いできないが、どうか一日も早く快復して、帰国されることを願っています」
と書かれていた。

本来の目的だったフェスティバルでの演奏は出来なかつたが、萩男にとっては夢のような韓国旅行であつた。

(了)

編者あとがき

著しくIT技術の発達した今日、かつて発表の機会に恵まれなかった無名アマチュア作家に大きなチャンスが到来しました。昨年末のAmazonのペーパーバック進出はさらに力強い追い風となっています。

故山中與隆は、定年後すぐに退職し、アマチュア

としてチェロを弾いて室内楽を好きなだけ楽しみな
がら第二の人生を過ごしておりましたが、それと同
時に、作家になることを目指して文筆を続けると宣
言し、毎年のように懸賞に応募していたようです。
それは近年まで続けられていたことがパソコンの中
身から分かりました。傍におります妻の私は、とう
に文筆を止めてしまっていると思っておりますの
で、それを知って愕然としました。

ここに、山中與隆が書き残しましたものを順次発表していこうと決心しました。なんらかのきっかけで本作品をお手にとって頂けたご縁を嬉しく思います。今後発表する作品にもご期待下さい。

またブログ ([URL:https://www.duoyamanka.com](https://www.duoyamanka.com))
への投稿の形でも発表していきたいと考えております

すので、あたたかく見守っていただければ幸いです。

二〇二二年四月

山中伶子

※1 山中與隆（やまなかともたか）の名前についで

與隆の「與」の字は「与」の旧漢字です。従って、入力時に「よ」で変換をかけると、下位ではありませんが、表示されません。

著者紹介

山中與隆（やまなかともたか）

一九三九年～二〇二一年

「名古屋生まれ、広島大学卒。小学校の教員暦七年、その後一般のサラリーマンを三〇数年。いまはリタイアして悠々自適の生活を享受中。大学時代に始め

た弦楽器（初めはヴィオラ、その後チェロ）を今も
続けている一方、小説や随筆の執筆にも力を入れた
いと思つています。

書くものとしては文学的なものから推理もの、歴
史もの、恋愛もの、ファンタジー、社会派的なもの
などジャンルを選びませんが、常にベースには何ら
かの形で音楽が絡んだものにしたたいと考えています。
ライフワークとしたい目標は、音楽を前面に出し

たもので読者の方々に小説としての読み応えと、そこに登場する音楽を是非聴きたいと思ってもらえるような、しかも私の著述によつてその物語にも音楽にも感動してもらえらるような作品を完成させたいと思つています。」

著者プロフィール(二〇一〇年五月)より

今後の出版予定作品

今後は、既刊の電子書籍のペーパーバック版を出版の予定です。

既刊作品

|| 電子書籍 ||

『都志見往来日記』 異聞

コンサートは開かれた

さまよえる視察団

蒸発の衝動

インテルメッツォ

爆発

妻が消えた

既刊の短編

アマールスを聞く男

オセロー

テンペスト

定年の晩

魂の三重奏

ロシアンルーレット

ささゆり

才能移転

ある三文作家が見たもの

けんか

袖ふれあうも

ミスターフエイト

峠を越えて嫁入りした女

花火見物

ある小学校教師の敗北

三坂峠 二話

第一話 《お蓮・勘兵衛 悲恋の墓》

第二話 《緑のトンネルで》

阿弥陀山

ゴーシユの華麗なる転身

ある男の臨終

野の寂しさ

四重奏

親も子も老いて

わしや、ただの山ザルじや

リヨウコからの電話

カルテットのあゝ風景

「オセロ」の手紙版

出来る間に、出来るだけ

なぜ？

紀行文

広島百山と吉和冠山登山

ひとり、山を歩く

短編シリーズ String Fiction Series

1 弦楽四重奏団 a

2 弦楽四重奏団 b

3 親和力

- 4 トリオ・ソナタ
- 5 不協和音
- 6 解散
- 7 音楽のある生活
- 8 ビオラを弾く生活
- 9 疑問
- 10 生きがい
- 11 激情

12 カルテット

最終三作品

裸の王様は何処へ行く

むかし俺がクマだったころ

ある兵士の物語

Ⅱ既刊のペーパーバックⅡ

『都志見往来日記』異聞

コンサートは開かれた

さまよえる視察団

短編集テンペスト他

短編集2―ある三文作家がみたもの他

短篇集3―ミスターフェイトほか

才能移転

2022年7月10日 初版発行

著者 山中與隆

編集発行 山中伶子

表紙素材元 silhouetteAC

脳

かみたまさん

人物 バイオリニスト

Tsuka

雪が舞う背景(レッド)

saharam

大勢の観客シルエット 集中線背景

セントラルアパート

©Tomotaka Yamanaka

<https://www.duoyamanka.com>
